白川研究所便り

白川静生誕 100 周年記念フォーラムの様子
（2010 年 6 月 6 日　立命館大学衣笠キャンパス以学館 2 号ホール）

第６号
発行
11.5.20

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所
〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1
電話　075-466-3470
Mail　toyomoji@st.ritsumei.ac.jp
URL　http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/sio/index.html

目次 ◆ index

中島敦の文学と白川静先生と（その二）　木村一信　2
白川静生誕一〇〇周年記念フォーラムと白鶴美術館記念講演会の報告　高島敏夫　4
『入門講座　白川静の世界』全三巻の刊行について　萩原正樹　6
漢字教育士資格認定講座の開講について　加地伸行　8
第四回立命館白川静記念東洋文字文化賞の選考について　9
「白川静文庫開設記念展」を終えて　芳村弘道　10
二〇一〇年度活動報告　12
編集後記　芳村弘道　16

中島敦の文学と白川静先生と（その二）

立命館大学特別招聘教授
プール学院大学学長
木村　一信

中島敦の作品に『古譚』と総題の付された四篇から成る作品群がある。その中の一篇「山月記」は、中島の代表作として知られ、広く人人に読まれている。一九四二年二月、中島の文壇デビューとなったこの作品は、深田久弥の推薦を受け、『文学界』に発表されたが、その折に〈古譚〉という総題が表記され、「文字禍」と共に二篇の掲載となったのである。掲載が見送られたあとの二篇は、「狐憑」と「木乃伊」。

単独で「山月記」について評され、論じられた文章は数多くあるが、『古譚』四篇を総体的に分析し、言及したものもいくつかを数えることができる。

中島の作品では最もよく知られている「山月記」は、当代一流の詩人になることを夢みて詩作に励み、果ては仕事を擲ち、妻子の生活を省みず、ついに「発狂」して人喰い虎になった男の物語であるが、他の三篇もまた何事かにとりつかれ、ついには身を滅ぼす人間の物語である。

「狐憑」は、文字通り「憑きもの」に見舞われた「シャク」という若者の話である。シャクには、「鷹だの狼だの獺だのの霊が哀れなシャクにのり移って、不思議な言葉を吐かせるということである」。このシャクの語る「不思議な言葉」に部落の人たちは「聞き惚れ」、シャクもまた次から次へと物語を作り出す。ついに、身近かな長老たちを題材にした話に及んだ時、長老らの「奸智」によってシャクは罰を与えられる。作品の末尾には、「ホメロスと呼ばれた盲人のマエオニデスが、あの美しい歌どもを唱い出すよりずっと以前に、斯うして一人の詩人が喰われて了ったことを、誰も知らない」（傍点・原文）とある。

「木乃伊」は、古代ペルシャの一人の部将「パリスカス」が、エジプトに進攻した際、学んだこともないその土地の言葉（埃及語）が理解できることの不思議さを感じるところから始まる。ある時、墓の中のミイラに対面し、そのミイラがかつての自分であったことに気づく。作品のラストには、

翌日、他の部隊の波斯兵がパリスカスを発見した時、彼は固く木乃伊を抱いたまま、古墳の地下室に倒れていた。介抱されて漸く息をふき返しはしたが、最早、明らかな狂気の徴候を見せて、あらぬ譫言をしゃべり出した。その言葉も、波斯語ではなくて、みんな埃及語だったということである。

とある。

「文字禍」は、文字の霊の存在とその正体を明らかにするために血を注ぐ古代アッシリアの老学者の物語である。彼は、「一つの霊が之を統べるのでなくて、どうして単なる線の集合が、音と意味とを有つことが出来ようか」と考えた。しかし、彼は、人間は文字を知ってから多くの弊害に見舞われたと結論づける。ある日、大地震がおこり、自家の書庫にいた「ナブ・アヘ・エリバ」は、「壁が崩れ書架が倒れ」、「夥しい書籍が――数百枚の重い粘土板が、文字共の凄まじい呪の声と共に此の讒謗者の上に落ちかかり、彼は無慙にも圧死した」のである。

以上、『古譚』四篇の内容を簡単に紹介したが、いずれも主人公たちは、何かにとりつかれ、熱中し、あるいは「発狂」するという運命にみまわれる。三人は、死という運命を甘受し、一人は獣としてその生を終えざるをえないという運命に陥る。

しかもまた、四人に共通するのは、「言葉・文字」へのかかわりを端緒としてその運命が動いていることである。このことはすでに、佐々木充をはじめとして、中島敦の研究者からの指摘がなされている。言葉（詩・物語）や文字（言語）に異常な関心を抱いたばかりに、その生が「狂」

や死へと向かっていくというこの『古譚』は、いずれも典拠をもちながらも中島敦独自の文学的テーマを色濃くうち出している。

二年前、私は『白川研究所便り』第四号（二〇〇九・三・三〇刊）に、「白川静先生と中島敦と」という短文を寄せた。そこで、白川先生が亡くなられる数週間前にご入院された折、先生は病院の天井を見つめて、そこに残る模様（おそらく、シミか壁の亀裂）が、漢字の一部に見えるとおっしゃり、ああでもない、こうでもないと呟いておられたエピソード（ご長女の津崎史さんより直接、おうかがいした話）について記した。何らかの線の跡、もしくは線の交錯、集まりは、白川先生にとって漢字の形成につながるとして天井を見つめておられたのであろう。中島の「文字禍」にも、そのことに思いをめぐらす「老儒ナブ・アヘ・エリバ」が記されている。つまり、「・・・・一つの文字を長く見詰めている中に、何時しか其の文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなって来る。単なる線の集まりが、何故、そういう音とそういう意味とを有つことができるのか、どうしても分からなくなって来る」といった記述と白川先生のエピソードとは照応する、と述べたのである。

今回、『古譚』四篇について触れたのは、白川先生の『文字遊心』（平凡社ライブラリー、一九九六・一一刊）に収められた「狂字論」は、さらに白川先生の言説と中島作品との共通性をよりいっそう明らかにすると感じられたからである。

たとえば、白川先生は、「古い時代の観念の上では、子供や狂人は神にもっとも近いものであり、未開の異族たちも、ときには神として扱われることがあった」と述べ、次のような言葉を続ける。

> 狂気を意味するalienationは、本来疎外を意味する語であり、さらにいえばalienは異邦人、異質なるものを意味する語である。狂気は理性にとって異質なものとして区別され、排除されるものであるが、しかし闇を通して微光がもたらされるように、人はこの異質なるものを内在させることによって、はじめて理性的であることができるのではないか。

そして、パスカルやフーコーの言葉を引用したあと、白川先生は、「狂気こそが理性と創造の源泉であり、狂気の歴史は、その民族の創造的な活力の消長を示すものであった」と記す。ここから、「狂の原義」について、ご専門の漢字の成り立ち、元の意味を分析し、「聖と狂」との内在や対称についても触れていく。

また白川先生は、「狂」について発言した最初の人は、孔子であり、聖人孔子と「革命にその一生を賭ける狂者」孔子とは、「一つの円環の上」にあるとの大胆な表現をする。

このあと、『論語』の中の言葉やそこからうかがえる孔子とその弟子たちの言動を見つつ、「離騒」（『楚辞』）なども踏まえて、「狂の精神」における二つの面を指摘する。すなわち、「一は自己貫徹的な誠実さ、孔子のいう『狂者は進みて取る』という積極的なありかた」と、「もう一つは自己投棄的な誠実さ、（中略）『死を譲けることのない』生きかた」との二面である、と。

松岡正剛は、その著『白川静―漢字の世界観』（平凡社新書、二〇〇八・一一刊）において、白川先生のこの「狂」についての二面性の解釈は、「白川静の知られざる思想の一面をよく伝えるもの」と評しているが、「知られざる」と言うより、むしろ私には白川学の根底を成す、もっとも基本的な在りようであったのではないかと思われる。

言葉・文字への熱着から「発狂」へと進み、まさに創造という営為に参画しようとした『古譚』中の主人公たちは、中島文学の基底を成すものである。白川先生の言う「自己貫徹的な誠実さ」と「自己投棄的な誠実さ」に賭け、死をも厭わず「狂」へと向かった姿は、白川先生のそれでもあったと言ってもよいのではないだろうか。

ここで紙幅が尽きた。続稿は別の機会を俟ちたい。

白川静生誕一〇〇周年記念フォーラムと白鶴美術館記念講演会の報告

研究員　高島　敏夫

「白川静生誕一〇〇周年記念フォーラム」を開催した二〇一〇六月六日（日）はホームカミングデーに当たっていて、各学部が競って意欲的な催しを開いた。白川文字学を研究する研究者を登場させて注目を浴びた、松竹映画「京都太秦物語」を制作した映像学部では、山田洋次監督出演のシンポジウムを催した。本研究所では松岡正剛氏を招いて講演会を行なった。松岡氏の『白川静　漢字の世界観』は白川先生のことを書いた一般書としては初めての書だということもあって評判を呼んだ。最終的には部数が何十万部に達したのであったか、分からないほどである。白川先生の生き方と学問のあり方とを巧みに描き出し、先生の仕事を広く世間に知らしめた功績は大きい。その松岡正剛氏を招いて、氏の講演とシンポジウムを開催した。松岡氏がインターネット上に『松岡正剛の千夜千冊』というサイトを開いて、古今東西にわたる様々な名著や話題作を紹介していることはよく知られているが、講演では期待にたがわぬ博識ぶりを披露された。松岡氏は、講演会が始まる前の控室の時から、白川先生の脳の働きに関する興味深い解釈を熱心に語られ、我々の関心を惹いた。そうした独自の観点からの白川静観を熱心に語って下さった。

講演会の後は「白川静を語る」と題したシンポジウムを行なった。松岡氏の他に、沈慶昊（韓国・高麗大学校教授）、津崎幸博（漢字教育工学学会理事・白川先生のご遺族）、谷口義介（前摂南大学教授）のお三方をお招きし、本研究所からは加地伸行所長、私の二人が加わった。司会は芳村弘道氏が担当された。

シンポジウムは、白川先生とのそれぞれの出会いについて一通り語っていただくところから始まった。時間的にかなり厳しい枠があったため、どなたも語りたいことが山ほどあるのに時間が足りないといった感じで話されていたのが印象的であった。年齢も立場も違う方々からの、興味深い様々な出会いと思い出話しをうかがうことができて意義あるシンポジウムとなった。

白川先生の『漢字』の韓国語訳者である沈慶昊氏からは、『漢字』の翻訳をめぐる苦労話しや、韓国における白川文字学の知名度などの興味深いお話をうかがうことができた。津崎幸博氏からは、白川先生の遺

谷口義介 氏

津崎幸博 氏

松岡正剛 氏

高島敏夫 氏

沈慶昊 氏

加地伸行 氏

稿『漢字の系統（表題不詳）』が出版される予定であることを紹介していただいた。谷口義介氏からは白川先生ご生前の様子などを交えて、先生の人となりが彷彿とするようなお話をうかがうことができた。

これからの白川文字学のあり方という話題にも及んだ。松岡氏は『字訓』がもっと読まれるべきだとされた。私としては、白川文字学をできるだけ正確に理解することが大切であり、そのためには『甲骨金文学論叢』を読んでおく必要があるとアピールした。それを受けて津崎氏は、この論文集は特別難解な書物ではなく、誰にでも分かるように書かれている論文集であることを強調された。《白川文字学の原点に還る》として「読〇〇」シリーズを展開してきた私も同感するところである。

白川先生の『金文通釈』を発行してきた神戸の白鶴美術館は、先生ととりわけ縁の深い美術館である。『金文通釈』は「白鶴美術館誌」として出されてきたものである。金文に出てくる文字は『大漢和辞典』にも載っていない文字が多く、出版そのものが困難を極めるものであったが、一九六二年に第一輯が発行され、一九八四年に第五六輯が発行されるまでの二二年間ずっと継続されたことは特筆に値する。白川先生は文字学によって一般の人にもよく知られるところとなったが、先生が最もエネルギーを注がれた著作は『金文通釈』ではなかったかと推測する。それというのも、晩年になって様々な賞を受けられるようになった先生だが、本当は『金文通釈』で賞をもらいたかったということを、ふと漏らされたことがあったからである。

その白鶴美術館で「白川静博士生誕一〇〇年」を記念した催しがいくつか企画された。当研究所にも講演の依頼があり、私がたまたま『金文通釈』第五六輯「金文通釈本文索引」を担当させて頂いたご縁もあって、お引き受けすることになった。当日話したことは漢字の先生としての白川静ではなく、学者白川静の専門的著述についての一通りの歩みを話してみた。『金文通釈』もその中に含まれる。そしてその中で、金文と『詩経』の語彙を例にとって、先生が字源を考えられる場合にどのような手続きを経て結論を打ち出していくか、ということを具体的に説明してみたのである。

その後、「白川文字学をいかに継承し発展させるか」にできるだけ沿った話しへと移った。大それた題目ではあるが、第二世代としての重要な課題である。

私が話したことは、白川先生があまり念頭に置かれなかった、言語と文字の関係をどう考えるかという問題である。文字とは「言語を記録する記号である」というのが言語と文字の関係を念頭においた定義だが、文字は無文字社会に生まれるものであるから、ここにいう「言語」とは口頭言語ということになる。ただし、口頭言語といっても日常的な話し言葉ということではなく、祭祀儀礼の際の口頭言語がある。このことにもっと注目すべきだと強調したのである。このような考え方を白川文字学に導入することによって、「祝辞を入れる器」である例の「㠯」が、後に口の意味になっていく過程を説明できる。こうして許慎の『説文解字』の時代にも繋ぐことができるのだ、という趣旨のことを話してみたのである。

当日は会場の椅子が足りなくなって、急遽椅子を追加したとのことだったが、白川先生のご講演の時は廊下にも人が溢れてしまって、お引き取りいただいた方が多数あったとお聞きした。講演の後、控室で樸社の木村元三さんがお待ちで、是非伝えたいことがあるとのことであった。それは白川先生からの伝言とのことだったが、私にとって身の引き締まるありがたい言葉であった。

『入門講座　白川静の世界』全三巻の刊行について

運営委員　萩原　正樹

二〇一〇年は白川静先生の御生誕一〇〇周年にあたり、本研究所便りにも紹介されているようにさまざまな記念行事が行われた。当研究所が編集した『入門講座　白川静の世界』全三巻も、この記念行事の一環として刊行された。

本書は「入門講座」と冠し、また加地所長の本書序言に「白川先生は不世出の碩学であり、その御業績は質量ともに他を圧しているため、読者は御著書の何をどのように読めばよいのかと迷うことも事実である。そこで、当研究所は、白川先生の御業績の総体を白川学と名づけ、その入門講座全三巻を編し、ここに世に送り出すこととなった」と記されているように、白川先生の学説に興味を持ち、これから白川先生の御著書を読み進めていこうと考えている方々にとって恰好のガイドブックとなるように編纂されたものである。全三巻は、「文字」「文学」「思想・歴史」の三冊に分かれ、各専門家によって、それぞれのテーマごとに従来の通説と白川説との相違が明らかになるような工夫がなされており、読者はこれらを読むことで、中国学の広大な世界の一端と白川先生の他に類を見ない優れた学説の特徴を理解できるであろう。また各巻の巻末には先生の主要著書・論文の解題が附されており、さらに本格的に白川学を学ぼうとする人にとって、良き道案内となっている。白川学に関心を持たれているすべての方々に、本書全三巻の御購読をお勧めしたい。以下に、『入門講座　白川静の世界』全三巻の内容と執筆者を紹介しておく。

第一巻「文字」

第一部　漢字とその歴史と

第一章　漢字の姿 …… 久保　裕之

第二章　中国古代文字―甲骨文と金文と …… 大形　徹

第三章　『説文解字』 …… 笠川　直樹

第二部　白川文字学の特色

第一章　白川文字学の意義 …… 嘉瀬　達男

第二章　白川文字学が開いた世界 …… 高島　敏夫

第三章　白川学における民俗学 …… 大川　俊隆

第四章　白川文字学の体系 …… 高島　敏夫

第三部　白川文字学の展開

第一章　『字統』 …… 笠川　直樹

第二章　『字訓』 …… 杉山　一也

第三章　『字通』 …… 滝野　邦雄

第四章　白川静の漢字・漢文教育論 …… 矢羽野隆男・矢羽野［古賀］芳枝

解　題

『漢字―生い立ちとその背景』（平塚順良）「文字学の方法」（平塚順良）『漢字百話』（尾崎裕）『漢字の世界―中国文化の原点一・二』（高石和典）『甲骨金文学論叢』（高島敏夫）『説文新義』（高島敏夫）『文字逍遙』・『文字遊心』（芳村弘道）『文字講話一―四』・『続文字講話』（高島敏夫）

第二巻「文学」

第一部　中国古代の文学

第一章　中国の神話……阪谷　昭弘
第二章　『詩経』『楚辞』……村田　進
第三章　民衆歌謡と詩と……今場　正美
第二部　白川学における中国文学
第一章　白川静の中国神話論……澁澤　尚
第二章　白川静の『詩経』論……中森　健二
第三章　白川静の『楚辞』論……谷口　洋
第四章　白川静の古代民衆歌謡論……萩原　正樹
第五章　白川静の自然詩人論……芳村　弘道
第三部　白川学と日本文化と
第一章　白川静の万葉論……上野　誠
第二章　白川学における＜訓＞……久米　裕子
第三章　白川静の古典論……佐藤　一好
解　題
『中国の神話』（豊後宏記）『中国の古代文学一―神話から楚辞へ』（高石和典）『中国の古代文学二―史記から陶淵明へ』（岡本淳子）「屈原の立場」（大澤直人）「楚辞叢説」（大澤直人）『詩経研究通論篇』・『興の研究』（高島敏夫）『詩経―中国の古代歌謡』（池田智幸）『詩経国風』・『詩経雅頌一・二』（平塚順良）『初期万葉論』（渡部亮一）『後期万葉論』（渡部亮一）『中国古代の文化』（堀口育子）『中国古代の民俗』（堀口育子）「尚書札記」（石井真美子）

第三巻「思想・歴史」

第一部　白川静と中国古代思想と
第一章　白川静の中国古代思想論……南　昌宏
第二章　白川静の＜儒＞論……南　昌宏
第三章　白川静の孔子論……吉永慎二郎
第四章　白川静の荘子・墨子観……藤居　岳人
第五章　白川静の司馬遷論……寺門日出男
第二部　白川静と中国古代史と
第一章　白川静の中国古代史論……杉本　憲司
第二章　殷の時代……谷口　義介
第三章　殷周革命……高木　智見
第四章　周の時代……谷口　義介
解　題
『孔子伝』（石井真美子）「周公旦」（石井真美子）「訓詁における思惟の形式について」（村田進）「卜辞の本質」（村田進）「殷の社会」（谷口義介）「殷の基礎社会」（谷口義介）『甲骨文の世界―古代殷王朝の構造』（池田智幸）『金文通釈』（高島敏夫）『金文の世界―殷周社会史』（池田智幸）『回思九十年』・『桂東雑記一―五』・『桂東雑記拾遺』（芳村弘道）

各巻とも、平凡社、二〇一〇年九月刊、定価一六〇〇円〔税別〕

漢字教育士資格認定講座の開講について

所長　加地　伸行

開講にあたって

当研究所は、東洋文字文化について広く社会一般を対象とした教育と普及とを行い、また学術研究の分野において東洋文字文化研究の振興と高度化とを図ることをその設立目的としている。

近年、漢字に対する社会の関心が高まる一方で、我が国の学校教育においては、漢字の歴史的、文化的側面について体系的に学ぶことのできる機会が少なく、わずかに専門分野において行われているにすぎない。教育の現場においては、漢字の諸知識を暗記するのみの指導に頼らざるを得ず、漢字の歴史的、文化的側面を踏んだ体系的な漢字教育を行うことのできる体制が整っていないのが現状と言えよう。

こういった状況を改善すべく、当研究所は白川文字学に基づく体系的な漢字教育の普及とそれを担当する教育者の育成とを目的とし、二〇一一年度より、広く社会一般に向けて漢字教育の専門的知識と技能とを体系的に学習することのできる講座である「漢字教育士資格認定講座」（以下「本講座」とする。）を開講する。

漢字教育の現場で指導を行う方々に役立つ体系的、実践的な講座内容となっており、国語教員の方や、これから小・中・高すべてにおける国語教員を目指される方、塾やサークル活動等の講師の方などは勿論、白川文字学に興味をお持ちの方や、漢字について体系的に学びたい方々にお勧めする。

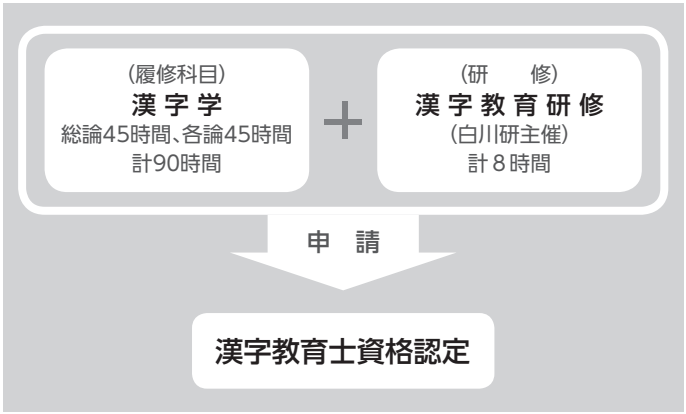
漢字教育士について（講座についての説明）

本講座は当研究所が定める所定のカリキュラムを修了した者に対し漢字教育者としての資格「漢字教育士」を認定することで、白川文字学に基づく体系的な漢字教育の普及とそれを担当する教育者の育成とを行うことを目的としている。本講座は履修科目および研修の２つのプログラムから構成されている。（概要図）

履修科目については当研究所が、教育目標やカリキュラムを確認し認定した大学等諸機関で開講される科目（計９０時間）の修了を資格取得の要件としている。

また、研修（計８時間）は履修科目によって習得した知識を体系的かつ効果的に活用し指導する能力を養うことを目的としたプログラムを実施する。この研修は、白川文字学、漢字指導法などを専門とする研究者が企画と運営とを担う。

※本講座に関する問い合わせは当研究所事務局まで。



漢字教育士資格認定講座概要図

第四回立命館白川静記念東洋文字文化賞の選考結果について

立命館白川静記念東洋文字文化賞教育普及賞

久米　雅雄　氏（大阪芸術大学客員教授）

受賞理由

従来の印章研究が印影や拓影を重んじた平面的研究に偏る学派と、実物の古印を重視する学派とがあるが、その二学派の手法に対して久米雅雄氏は、ともに批判的に検討し、考古学的手法を導入した。すなわち、発掘によって層位学的に時代差を把握すること、ならびに実物印の形式を区分し形式ごとの時代的変遷を把握すること、この二方法によって相対的編年を行い、各時代の鈕式と文字書体の特徴を明らかにし、印ならびに印影の作製時代を体系的に推定することに成功した。印章の文字書体を中心とする漢字文化の研究に関するすぐれた業績を高く評価した。

受賞者の声

永年、考古学的・文字学的・歴史学的方法を用いて、中国・朝鮮・日本などのアジアの印章研究に携わってまいりました。このたび栄誉ある賞を賜り、過分のことと深く感謝致しております。ひきつづき歴史・文化・民俗・思想等の集積体としての漢字文化の研究を推し進め、東洋の精神のより具体的な把握や平和の実現のためにつとめて参ります。

立命館白川静記念東洋文字文化賞奨励賞

岡墻　裕剛　氏（北海道大学大学院文学研究科専門研究員）

受賞理由

明治時代初期において、B・Hチェンバレンが著わした『文字のしるべ』の文献学的研究を行ない、『日本基本漢字』・「漢字用例」・公的漢字表等との比較を通して同書の特徴と傾向とを明らかにし、かつ現存する同書二十九冊における書き込みの様態を精密に調査し、漢字学習の実態について精密な検討を行った。これは、日本近代における漢字普及度の実態や、国語教育史の研究において、従来になかった視点であり、この『文字のしるべ』研究を基礎にして、研究のさらなる展開が大きく期待されると高く評価した。

受賞者の声

白川先生の生誕一〇〇周年という節目の年に、このような誉れ高い賞を賜りましたこと、身に余る光栄と恐縮しています。漢字研究に携わる者として、この賞の名に恥じぬよう精進努力を心がける所存です。明治時代の西洋人さえ惹きつけた漢字の魅力と複雑さについて研究を深めることで、日本の文字文化のさらなる発展に寄与したいと考えています。

選考委員

委員長　加地伸行

委　員　上野隆三・木村一信・下中美都（五十音順）

「白川静文庫開設記念展」を終えて

副研究所長　芳村　弘道

白川静先生の御生誕一〇〇周年に当たった昨春、本学図書館に「白川静文庫」が開設された。また、昨年は立命館創始百四十年、学園創立百十年の年でもあった。当研究所と本学図書館とは、これらを記念した企画として、五月一〇日（月曜）から六月二四日（木曜）までの間（五月三一日まで前期展示、六月一日から後期展示）、図書館一階の展示コーナーにおいて「白川静文庫開設記念展」を開催した。この展示については小紙前号にも開会式の模様などをお伝えしたが、出陳された資料などの具体的な紹介には及ばなかったので、ここに本展の報告も兼ね展示の概要を記すことにする。

本展は大きく四つのコーナーに分け、文庫所蔵の御著書や手稿、パネル写真を中心に構成し、白川静先生の学問と生涯をたどれるようにした。第一のコーナーは壁面備え付けの大型展示ケースを用いた「写真と書物で辿る白川静先生の学問と生涯」である。故郷福井市の御旧宅跡に建てられた記念碑の写真を掲げ、少年期に親しまれた郷里の歌人、橘曙覧の全集（桜楓社、一九八三年）を配した。また御逝去の前年（二〇〇五年）、福井で講演された「橘曙覧の短歌史上の位置について」の講演録の手校も並べた。出郷の後、大阪・京都で過ごされた青少年時代に愛読され、東洋に対する強い意識をもたれる契機となった書物、岡倉天心『東洋の理想』（創元社、一九三九年）、幸田露伴『幽秘記』（一九七二年覆製本）、土岐善麿『作者別万葉短歌全集』（東雲堂書店、一九一五年）のほか、この頃に愛用されて字書のありかたに注目された大槻文彦『言海』（吉川弘文館、一九二二年）も加えた。立命館に学ばれ、学問の道に進まれようとした当時の書物としては、白川先生の恩師のお一人であった小泉苳三先生の論文「大伴家持」が載る『短歌講座』（改造社、一九三一年）や漢籍五種を展示した。漢籍のうち清末の呉大澂『字説』（新振書社石印、一九一八年）は、先生が甲骨文・金文、文字学に関心を抱かれるようになった書物の一つである。また清代考証学の成果を学ぶために購入された『皇清経解』、中国における近代的な古代研究を開き、先生の学問にも影響を与えた王国維の『観堂集林』（王氏遺書本、一九二七年）も展示した。

このコーナーの第二展示は、白川先生が立命館大学での講義のために書き下ろされ、油印刊行して学生に配布された中国文学史（古代から明清まで五冊）などの講義案、台湾の中央研究院国際漢学会議で発表された論文、『字通』（平凡社、一九九六年）とその原稿、御夫人悼亡の短歌を記された「卯月抄」の手稿などを出陳した。パネル写真は御著作に対応させ、大学での講義中のもの、国際会議での合影のほか、文化功労者として顕彰された（一九九八年）後、夫人と共に出席された皇居園遊会で撮影されたものなどを掲げた。

オープニングセレモニーで挨拶する吉田美喜夫前図書館長
（2010年５月10日　衣笠キャンパス図書館）

第二のコーナーは「研究者として」である。これ以下は写真がなく、御著書・手稿などを展示ケースに並べた。戦前に作成された資料・研究ノートの類として「古事記字音假字用例　歌謡篇」「日本書紀假字用例　本文篇」「日本書紀假名用例　歌謡篇」「同分布表　本文篇」を出陳した。この資料は白川先生が日本（ひいては広く東洋）を探究しようという志を早くにもち、独自に研究を進められていたことを窺い知るものである。先生は二万片以上もの膨大な数の甲骨文字をノートに写し、あるいはトレースされ、これを駆使し、殷周史の問題を研究され、金文学の討究も深められ、「白川文字学」を確立された。その学問的軌跡を垣間見ることができる資料として、明義士編『殷虚卜辞』のトレース、郭沫若『両周金文辞大系』（文求堂、一九三五年）を展示した。後者は先生の批注が少なくなく、この書の利用のため「人名索引」「官名索引」も自作された。先生が初めて学問的成果を世に問われたのは昭和二三年（一九四八年）発行の「立命館文学」第六二号掲載の「卜辭の本質」である。昭和二〇年に成った原稿が遺されていたので、掲載誌とともに陳列した。第三の論文「殷の社会」（「立命館文学」第六六号、一九四八年掲載）の手稿も添えた。初期の論文の後も、先生は論考を絶え間なく発表され、鬱然たる「白川学」を成されたが、甲骨・金文学は出版に困難なために、みずからも「ガリ版」を切って『甲骨金文学論叢』十集を一九五五年から六二年までに出版された。所載の論文のうち「釈史」の手稿が文庫に見出せたので併せて展示した。この論文は「白川文字学」の重要な学説「Ｄ（サイ）」を論じる内容でもある。「ガリ版」の研究書には『稿本詩経研究』三篇（一九六〇年）がある。これに「初稿」とされた原稿も加えた。また『金文通釈』（白鶴美術館、一九六二～八四年）『説文新義』（五典書院、一九六九～七四年）にも手稿を留めておられ、その一部を刊本と併せて展示した。『説文新義』は、もと「樸社」での講義を基にされたが、「説文解字」「説文初講」と表題された原稿も陳列し、本書完成に至るまでの経過が把握できるようにした。

今回、直筆の原稿を多く陳列したのは、学問に生涯を捧げられた先生の気迫というものも感じ取っていただきたいと思ってのことであった。なお筆者は文庫の資料類の整理を担当し、少壮より晩年に至るまで、先生の「書」に変化があったことを今更ながら知った次第で、晩年の字を見慣れていたため、お若い頃の手稿は別筆かと始め疑うようなこともあった。

最後のコーナーは「海外への学問の広がり」とした。第一の展示ケースは、中国・台湾・韓国で翻訳された白川先生の著作を並べ、「白川学」が東アジア的規模ですでに大きく影響を与えていることを知って戴こうとした。台湾の教育部長にも任ぜられた古代研究の大家である杜正勝氏が訳された『詩経的世界』（東大、一九九〇年改版。日本版『詩経』）、林琦氏など共訳『漢字』（厦門大学出版、二〇〇六年。日本版『漢字の世界』）、高麗大学校の沈慶昊氏（第一回「白川静賞」受賞者）翻訳の『漢字百話』（原ハングル表記省略。牡牛座、二〇〇五年）などを展示した。第二のケースには、先生と学術交流を行った中国・台湾の学者の献呈本を陳列した。楊樹達氏『耐林廎甲文説・卜辭求義』（群聯出版、一九五四年）、胡厚宣氏『戦後京津新獲甲骨集』（群聯出版、一九五四年）、容庚氏『蘭亭集刻』、楊寛氏『楊寛古史論文選集』（上海人民出版社、二〇〇三年）、金祥恒氏『匈文編』（藝文印書館、一九六四年）など。なお、白川静文庫中の貴重本として、「文学革命」を提唱し近代中国の学術・文学界に大きな足跡を遺した胡適が献辞を記して青木正兒博士に贈呈した清の章学誠『章氏遺書』（浙江図書館、一九二〇年）を特別に出陳した。この本については拙稿「白川静文庫と文庫所藏の胡適手識『章氏遺書』」（「學林」第五一号、中国藝文研究会、二〇一〇年）を参考されたい。

後半の会期には、「教育者として」という小コーナーを追加し、橋本循先生の元で編纂された高等学校の漢文教科書『新修高等漢文』三巻・

『同　教授参考資料』（白楊社、一九五六・七年）を陳列した。先生は戦前に立命館中学の教壇に立たれたこともある。また晩年において漢字教育にも提言されることが多かったが、この教科書に附録された「文字の話」は、学術論文以外で初めてその字説を示された一文である（後に『桂東雑記　拾遺』、平凡社、二〇〇六年収録）。

このほか各社から出版された白川静先生の著書、関連書籍・雑誌をまとめて書架に展示して「白川学」の偉業を改めて知って戴けるようにした。また映像を通しても先生の学問と人生の歩みを理解できるよう、御生涯を簡潔に紹介するビデオも常時、放映した。書籍を一括展示した壁面には、白川静先生も臨席されて行われた二〇〇六年の第一回「白川静賞」授賞式の記念写真、当研究所所蔵の「毛公鼎」「散氏盤」の原拓本の額を掲げた。

五十余日に亘る会期中の参観者は延べ一千五百三十六名にも及んだ。中には遠く東北地方からご夫婦で来られた方、また幾日も足繁く見学された方もあったと聞く。西川一誠福井県知事の御参観については小紙前号に紹介したが、六月六日のホームカミングデーには、多数の見学者で入場が一時困難になるほどの盛況であった。多くの熱心な来場者が得られ、成功裏に展示が終わり、白川先生の学徳に敬仰の思いを篤くした。

白川静文庫開設記念展を観覧する西川一誠福井県知事

二〇一〇年度　活動報告

文化事業

文化事業担当　久保　裕之

文化事業としては、研究所設立の六年目にあたる二〇一〇年度には、前年度に引き続き、白川文字学の一般への普及とネットワーク作りに重点を置いて、以下の活動を展開した。

体験型漢字講座「漢字探検隊」

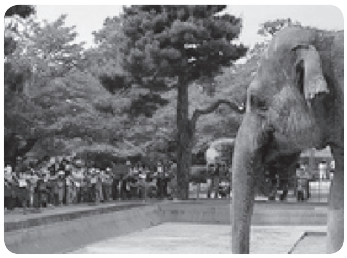
二〇〇七年度より始まった「漢字探検隊」は、毎回一つのものをテーマとして、座学だけではなく、見学や体験を通して漢字の成り立ちとそのもとになった自然や文化を学習する体験型の講座である。本年度の実施講座は以下の通り。

京都・東京は年間複数回の開催を行っているほか、宮城・広島では、年1回の恒例開催となっている。本年度は「オール立命館校友大会」の福岡市での開催に合わせて、太宰府天満宮での開催が実現した。神戸での開催はコープこうべ生活文化センターとの共催である。

地域	回	実施年月	テーマ	講座名	参加申込	場所
京都	20	2010・5	動物	動物園で漢字と出合う	124	京都市動物園
京都	21	2010・8	醸造	お酒と漢字	50	月桂冠大倉記念館
京都	22	2010・12	植物	植物園で漢字と出合う	39	京都府立植物園
京都	23	2011・3	災害・気象	災害・気象と漢字	68	京都市市民防災センター
京都	24	2011・3	—	漢字あそび大会	120	立命館大学
東京	10	2010・6	海洋生物	水族館で漢字と出合う	32	しながわ水族館
東京	11	2010・9	災害・気象	防災と漢字	21	東京消防庁本所防災館
東京	12	2011・1	食べ物	市場で漢字を探そう	15	文京区公設真砂市場
宮城	2	2010・5	農業	ふるさと漢字探検隊	60	角田市一円
神戸	4	2010・8	科学	漢字に見る科学の目	56	神戸市立青少年科学館
広島	3	2010・5	動物	動物園で漢字と出合う	23	広島市安佐動物公園
福岡	1	2010・10	神	神様と出合う漢字	16	太宰府天満宮

水族館で漢字と出合う
（東京・しながわ水族館 2010年6月）

災害・気象と漢字
（京都市市民防災センター 2011年3月）



動物園で漢字と出合う
（京都市動物園 2010年5月）

市場で漢字を探そう
（東京都文京区・公設真砂市場
2011年1月）

漢字あそび大会
（立命館大学国際平和ミュージアム
2011年3月）

植物と漢字
（京都府立植物園 2010年12月）

学内他組織との連携事業

二〇一〇年八月には、立命館大学国際平和ミュージアムとの共催により「戦争と平和の漢字」についてワークショップを開催、戦争から生まれた漢字について学んだ。同年十月下旬から十一月初旬の一週間には、同じく国際平和ミュージアムとの連携で平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色　文字・活字文化の日特別企画」を本年も開催した。平和への願いを一字で表すコーナーを設け、参加者には虹の七色等の漢字について解説したカードをプレゼントした。

九月には立命館附属校を紹介する「立命館フェア」で、また十月末に開催された上述の「オール立命館校友大会」では、会場内に「生誕一〇〇周年・白川静の世界」の出展を行った。

他の教育機関との共催

神戸のコープこうべ生活文化センターと神戸市立青少年科学館との共催により、二〇一〇年八月に「神戸漢字探検隊・漢字に見る科学の目」が開催された。また十月から十二月にかけて、同センターにおいて一般向けに「白川静と東洋文字文化の世界」講座を、また児童向けに「子ども漢字塾」を開講した。

福井県との連携

福井県とは引き続き活発な連携が続いている。白川静生誕百年を迎えた二〇一〇年度は、「文字の国・福井」を標榜し、県内外で催事や展示、講座開催など様々な活動がなされた。

二〇一〇年四月には、白川静を「ブランド」として首都圏で売り出すべく、東京で白川研と福井県、文化教育サポーターズとの共催による「白川静と東洋文字文化の世界」講座を開催した。

二〇〇九年度に白川研と東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との共催により京都で開催した「好奇字典」のパネル展示が、二〇一〇年十月に福井県立図書館・白川文字学の室で行われた。

また、県教育委員会主催による「白川文字学指導者養成講座」、一般向けの「漢字文化講座」、児童と保護者対象の「親子ふれあい漢字教室」が開かれ、白川研より都度講師を派遣した。

映画「京都太秦物語」は二〇一〇年九月に福井市でも公開され、県の広報協力そして県青少年愛護審議会の推奨も得て、他地域には比類しない興行成果を挙げた。

二〇一一年度には従来の取り組みに加え、教員対象の「漢字教育士」養成講座の開催や、県教委・福井大学との連携による集中講座の開講が予定されている。

白川文字学・親子ふれあい漢字教室
（福井県立こども歴史文化館
2011年8月）

立命館フェアでの展示
（京都市・みやこめっせ 2010年9月）

白川文字学・親子ふれあい漢字教室
（敦賀市立図書館 2011年2月）

白川静博士生誕百年記念フォーラム
（福井県生涯学習館 2011年5月）

白川文字学の普及者とのネットワーク構築

全国で白川文字学の普及に努力されている教員や漢字研究者とのネットワーク作りは三年目を迎え、ネットワーク相互間での連携が行われ、その成果が現れ始めている。

①書籍発刊

福井県教育委員会編の小学校用字源辞典『白川静博士の漢字の世界へ』改訂版（平凡社刊）と小寺誠氏（元京都府教員）による系統別字源解説書『白川静式小学校漢字字典』（フォーラム・A刊）が、二〇一一年二月に刊行された。

②出張講座

滋賀県草津市立南笠東小学校と京都市立正親小学校への出前授業および教職員への講習会に招かれた。また白鶴美術館（神戸市）の講演会にも講師を派遣した。

③　伊東信夫氏（漢字研究家。『漢字が楽しくなるシリーズ』（太郎次郎社エディタス刊）や『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界シリーズ』（スリーエーネットワーク刊）の著者）を「京都漢字探検隊―漢字あそび大会」に招き、講演などを行った。

文化教育サポーターズ（東京都文京区内を中心に有識者・企業・保護者等により結成、教育支援の目的でセミナー、シンポジウム等を開催している団体）により、二〇一〇年十一月に文京区春日・公設真砂市場内にて「東京漢字探検隊」常設ブースを開設。児童向けの漢字教室、白川関連書籍の発売などを行っている。

二〇一一年度は、これまでの活動の深耕を図るとともに、新しい地域での普及を図っていくこととしたい。

学術事業

研究員の主な研究業績

○加地　伸行

著書　『考研究―儒教基礎論』（加地伸行著作集第三巻・研文出版　二〇一〇年一一月）

『沈黙の宗教―儒教』（ちくま学芸文庫）（筑摩書房　二〇一一年四月）

○芳村　弘道

著書　『十抄詩・夾注名賢十抄詩』（汲古書院　二〇一一年三月）

『入門講座　白川静の世界Ⅱ　文学』（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所叢書・平凡社　二〇一〇年九月）

論文　「白川静文庫と文庫所蔵の胡適手識『章氏遺書』」（「學林」第五一号　二〇一〇年六月）

「南宋選學書『選詩演義』考」（「日本中國學會報」第六二集　二〇一〇年一〇月）

○萩原　正樹

著書　『入門講座　白川静の世界Ⅱ　文学』（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所叢書・平凡社　二〇一〇年九月）

翻訳　「『詞学筌蹄』考論」（「風絮」第六号　二〇一〇年三月）

論文　「静学詞存」（「風絮」第六号　二〇一〇年三月）

「蕪城秋雪の『香草墨縁』について」（「學林」第五一号　二〇一〇年六月）

「論中国的〝日本詞〟研究」（「徐州工程学院学報」（社会科学版）第四号　二〇一〇年七月）

「森川竹磎的詞論研究」（「南京師範大学文学院学報」第五九号　二〇一〇年九月）

「関於《欽定詞譜》両種内府刻本的異同」（「詞学」第二四号　二〇一〇年一二月）

「森川竹磎研究ノート　中村花瘦と森川竹磎」（「學林」第五二号　中国藝文研究会　二〇一〇年一二月）

○高島　敏夫

著書　『入門講座　白川静の世界Ⅰ　文字』（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所叢書・平凡社　二〇一〇年九月）

編集後記

○昨年、二〇一〇年は白川静先生の御生誕より百年に当たり、当研究所はそれを記念するいくつかの事業を行った。幸いにも多くの方々の御協力、御参加が得られた御蔭をもって、いずれの企画も好評を博し、成功できたことを大変うれしく思っている。みなさまに篤く感謝申し上げる。今号の小紙は、その報告に関する内容を主とした。

○当研究所の前副所長でもある木村一信先生から「中島敦の文学と白川静先生と」の続篇を寄稿戴いた。「狂」をめぐって中島文学と白川先生の思想について説かれたもので、中島敦研究の第一人者による一文だけに、まことに興味深く、さらなる続稿が待ち望まれる。

○白川先生生誕一〇〇周年記念の一環として、二〇一〇年六月六日の「ホームカミングデー」にあわせて当研究所は二部構成で「白川静生誕一〇〇周年フォーラム」を衣笠キャンパスで行った。第一部は松岡正剛氏を招いての講演会、第二部は「白川静を語る」と題してのシンポジウムを開いた。当日のパネラーの一人であった高島敏夫研究員の一文は、その報告ならびに白川先生の「金文通釈」を刊行した白鶴美術館での記念講演の内容紹介である。本学での講演会・シンポジウムに多数の熱心な聴講者があったことが思い出されるが、白鶴美術館の記念会も大盛況であったとの由で、「白川学」への関心が変わらずに高いことが知られて心強い。

○白川先生の生誕一〇〇周年記念事業の大きな柱と位置づけたのが、当研究所が編纂した『入門講座　白川静の世界』の出版である。昨年九月に平凡社から刊行され、「白川学」への良き手引きとして大きな反響を呼んでいる。本書全三巻の内容の概略を萩原正樹研究員が「『入門講座　白川静の世界』全三巻の刊行について」にまとめている。この場をかりて本書全三巻の御購読をお願い申し上げる。

○当研究所は二〇一一年度より「漢字教育士資格認定講座」を開講した。これは、学内だけでなく、広く学外の一般の方々にも向けて漢字教育の専門的知識と技能を体系的に習得できる講座である。日本はいうまでもなく、中国や韓国などの他の漢字文化圏においても漢字教育の資格認定は最初にして唯一の事業である。「漢字教育士」の資格認定は、今後わが研究所の存在価値を高める重要な活動となるので、大方の御支援を切にお願いしたい。

○第四回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」の授賞式は、「白川静生誕一〇〇周年フォーラム」の中で執り行われたが、その選考報告と受賞された久米雅雄氏・岡墻裕剛氏のご挨拶の言葉とを掲載した。

○二〇一〇年の五月一〇日から六月二四日まで、「白川静文庫開設記念展」を本学図書館との共催で衣笠キャンパス図書館一階の展示コーナーで開いた。これも白川先生生誕一〇〇年の記念事業の一つである。展示された白川文庫所蔵本・資料類などの紹介を行い、同展を振り返ったのが芳村の記事である。参観された方には御一読あって、当日のことを思い出して戴ければ幸いである。

○文化事業の活動報告は、久保裕之文化事業担当員にお願いした。二〇一〇年度も活発な文化事業が行われたことを御理解戴けると思う。学術事業の報告は、研究員の昨年度主要研究業績の紹介にとどめた。

（芳村弘道記）